である。

現在、養殖経営体数は40、養殖面積680,194 m²で145トンの生産をあげるにいたっている。熊本県での昭和46年の車エビの総生産量は274トン、金額 699,194千円で、養殖物と天然物が半々の生産量である。

ハ 池の構造

養殖池の構造は入江を利用した半築堤で、池壁はコンクリート壁あり、土堤のものありである。注排水は比較的粗放的な干満潮差を利用して行れ、干満差が4～5mと大きいことから海水の交換はよい。池の水深は満潮時には4m、干潮時には1mが普通である。池が浅いと照度が高いために緑藻が繁茂して、夜間の酸素不足を起す原因になるとのことで、注意がはらわれている。池の面積は1万～2万坪程度のものを2～3面に区画して使用され、池底は水面に向って勾配をつけ、何条かの溝をつけたり、うねを作ったりしている。池底のレベルは小潮の干潮線あたりにおき、水門の底はそれよりやや低くが基準とされている。

ニ 種苗の放養

熊本県内の種苗需要は2,000万尾程あるが、現在、県の人口種苗センターでは250万尾の供給しかないために大半は山口県や他府県に依存している状況にある。

放養は5月～6月上旬の水温15°C以上になった時に体長2cm.体重0.02gの大きさの種エビを、1尾1円30銭～1円50銭で購入し放している。

放養量については、池水の交換率によって大きく左右されることから、一概に決められないとのことである。一応の目安としては、流入水の水温28°C、酸素飽和度80%の場合、池水の交換率が1/3ならば、450g/m²、1/10ならば100g/m²が基準とされている。大半の池では種エビから5g程までは200尾/m²、出荷時の20～25gのサイズになれば300g/m²が普通のようである。

種苗放養から出荷までの残存率は70%の高い所もあるようであるが、現場管理者の話によれば40～50%が堅い線とされている。

ホ エサと給餌

エサはアサリが8割で、残の2割はカタクチイワシ、アジ類、赤エビが利用されている。特に10月以降はアサリ漁場の干潟地がノリヒビ張付との競合により、大きく縮小されるために他のエサに依存している。

研修を受けた九州活魚では、エサ不足の対応としてイカの足にコイの稚魚用ペレットを混合して与えていた。一方の益田水産では初の試みとして、中国より冷凍のムキ身カキを輸入して与えるなど、各養殖場ともエサ不足は深刻なようである。